

## どの席で映画を観ますか？

6月と云えば梅雨。そんな鬱陶しい季節の雨をテーマに制作された、軽快でコミカルな『雨に唄えば』で唄とダンスを楽しみ、梅雨をふっ飛ばしましょう。

いつも、映画をりぶらホールの中の席でご覧になれますか？ 全体が見渡せる中央、字幕が右縦の場合はやや右寄りなど、皆さん各々ですね。毎回、りぶらホールの座席は中央部から埋まり、最後に左右の端と前部の席が残ります。この『雨に唄えば』はどこの席がよいのでしょうか？

この映画を大きなスクリーンで観る場合、視野にスクリーン全体が収まる中央やや前部が、絶好のスポットではないでしょうか。ミュージカルの激しいダンスが迫ってきて、画面にくぎ付けになると思います。

この映画を見たとき、『ウエストサイド物語』など、後に制作されたミュージカル映画の原点がこの作品にあることを発見することができました。 au

## 変わらない感動と、変わる見方

生身の人間がここまでやれるのかと思わせるハイレベルなタップダンスと軽快なメロディーと、突然挿入されるこの作品のミュージカルシーンはまさに問答無用。観終わった後の満足感と幸せな気分、つい顔がほころんでしまいました。

特に気に入ってDVDで何度もプレイバックしたシーンは、①キャシー（デビー・レイノルズ）への想いに悩むドン（ジーン・ケリー）を元気づけるため、コズモ（ドナルド・オコナー）がピアノを弾き、唄い踊る『Make' Em Lauph（笑わせろ）』、②ドンとコズモが発音練習の教材セリフをネタに破天荒のタップでレッスンを滅茶苦茶にしてしまう『Moses Supposes（モーゼズ・サポーゼズ）』、③苦境を打開するトーキー・ミュージカルの妙案創出を祝い、ドンとコズモがキャシーを挟んで真夜中に歌い踊る『Good Morning!（グッド・モーニング！）』。そして④ミュージカル映画史上に残る名シーンといわれる、ドンが土砂降りの舗道で唄い踊る『Singin' In The Rain(雨に唄えば)』でした。

私はこの作品を、半世紀以上前の大阪の二番館で観ています。当時は、デビー・レイノルズが可愛くっていいなと思ったこと、この作品を観た数年後に彼女が唄った『タミー』と、彼女の最初の夫、エディー・フィッシャーの唄った『愛しのシンディー』が大ヒットして、レコードを購入したことくらいしか印象に残っていませんでした。今回の上映に先立ってのレビューで感じた新鮮な驚きは、まさに想定外でした。半世紀の経過はこんなにも物事に対する見方、感じ方を変化させるかと改めて感慨を覚えます。K.M.

## 無声からトーキーへのバックステージミュージカル

今年2月26日の第84回アカデミー賞では、モノクロ＆無声の『アーティスト』が作品賞を受賞しました。

舞台は1927年のハリウッド。スター俳優のジョージは若い端役女優のペピー・ミラーを見初めてスターへと導くけれど、折しも映画産業は無声からトーキーへの移行期。無声映画に固執し続けるジョージが落ちぶれていく一方で、ペピーはスターダムを駆け上がっていくというストーリー。『雨に唄えば』を思い出さずにいられません。

「サイレント映画が古いと思われているのは、1920年代で製作が終わってしまったからであって、サイレント映画そのもののフォーマットは時を超えて、年齢がないと思っています。ですので、もっとモダンなサイレント映画を作れると思いますし、この映画がその例だと思っています」と、M・アザナビシウス監督は「映画.com」のインタビューに答えていました。

実際にサイレント映画をほとんど観ていない私にも感動できる作品でしたので、『アーティスト』は、ハイブリッド・エンジンを積んだクラシックカーだと思（芝山幹郎）」という評にも納得したのですが、無声からトーキーへの移行期のバックステージものとしての、『雨に唄えば』の影響もあるのではないかと思っています（誰も言及していないようですが）。

トーキーのブームを過熱させた一因として、トーキーになって初めて可能になったミュージカルというジャンルがあったようです。トーキー時代の到来と世界恐慌が重なったため、弱小会社の倒産が相次ぎ、アメリカの映画業界はビッグ5と呼ばれる大手映画会社（MGM、パラマウント、フォックス、ワーナー、RKO）と準大手3社（コロンビア、ユニバーサル、ユナイテッド・アーティスト）が支配する構造が1950年代まで続くことになり、特にMGM社は、ジュディ・ガーランドやジーン・ケリー、フレッド・アステアなど数多くの優れたミュージカル俳優の出演する、豪華な作品群で一世を風靡しました。

その後、テレビの普及によって映画産業の衰退が始まりますが、1970年代、私は1950年代の映画を、そのテレビで堪能することができました。おそらく『雨に唄えば』が一番多くテレビで観た映画かもしれませんが（何回かはいろんな場面がカットされていましたが）。それから、その当時観ていた水着の女王エスター・ウィリアムズも懐かしいですね。思わずネットで検索してしまいました。88才でご健在のようです。

ともあれ私は、古い映画も新しい映画も楽しみたい。できればどちらも大きなスクリーンで。 e3

2012.6.21  
vol.18

## 『雨に唄えば』

シネマ・ド・りぶらの  
コラム・ド・シネマ

### 私が観たミュージカル映画のベスト10

『雨に唄えば』は、映画がサイレントからトーキーに移行する瞬間のハリウッドを取り上げた、コメディタッチの映画である。単なるミュージカル映画という印象とは、ちょっと違う内容であった。ジーン・ケリーの雨中でのタップダンス（靴で床をたたき音で構成する踊り）と歌の素晴らしさは当然ながら、ドナルド・オコナーの見事なタップダンス、そして軽い身のこなしによる踊りのうまさに驚かされた。彼が出てきただけで、画面が一気に輝き始めることは注目される事であった。この映画が、60年前に製作されたものとは思えない新鮮さを感じた。

「ミュージカル」とは、アメリカに誕生し発展した舞台芸術の一形式で、音楽・舞踊・演劇の三つの要素の総合芸術である。日本におけるミュージカルの歴史は、第二次世

界大戦後に第一歩を踏み始め、帝劇ミュージカルから東宝ミュージカルへと受け継がれ、最近では劇団四季の業績も見逃せない。『雨に唄えば』の日本での舞台は、宝塚歌劇団宙組により2008年に上演された。 S.N



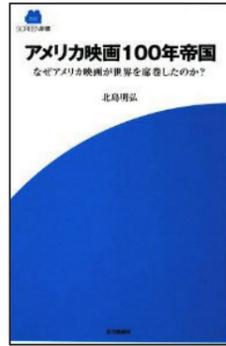
製作年	映画名	主演者	代表曲
1939	オズの魔法使い	ジュディ・ガーランド	虹の彼方に
1950	アニーよ銃をとれ	ベティ・ハットン	カーネル・バッファロー
1954	スター誕生	ジュディ・ガーランド	スワニー
1956	王様と私	デボラ・カー ユル・プリンナー	シャル・ウイ・ダンス
1958	南太平洋	ロッサノ・ブラッツィ	魅惑の宵
1961	ウエスト・サイド物語	ナタリー・ウッド ジョージ・チャキリス	トゥナイト
1964	マイ・フェア・レディ	オードリ・ヘプバーン	踊り明かそう
1965	サウンド・オブ・ミュージック	ジュリー・アンドリュース	エーデルワイス
1972	キャバレー	ライザ・ミネリ	私の愛するあなた
1977	サタデー・ナイト・フィーバー	ジョン・トラヴォルタ	恋のナイト・フィーバー

『雨に唄えば』  
フィルムデータ

原題：Singin' in the Rain  
製作年：1953年  
制作国：アメリカ  
上映時間：103分 カラー

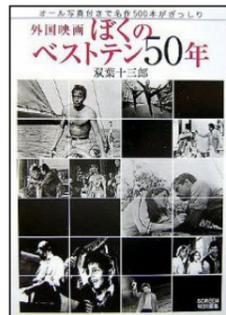
監督：ジーン・ケリー、スタンリー・ドーネン  
音楽：レニー・ヘイトン、ナシオ・ハーブ・ブラウン  
アーサー・フリード  
出演：ジーン・ケリー、デビー・レイノルズ、ドナルド・オコナー  
ジーン・ヘイゲン、シド・チャリシー

りぶらサポータープロジェクト 「シネマ・ド・りぶら」  
『雨に唄えば』 関連図書案内  
& DVD



無声から  
トーキーへ

N 778.220 共同通信社  
『世紀の映画監督名鑑 (Mook21)』



N 778.2 双葉十三郎 近代映画社  
『外国映画ぼくのベストテン50年』

N 778.2 キネマ旬報社  
『午前十時の映画祭  
何度見てもすごい50本』



N 778.2 キネマ旬報映画音楽篇  
『オールタイム・ベスト映画遺産』



N 778.0 園村昌弘 博文舎  
『ゴールデン・エイジ  
映画それぞれの黄金時代』



778.2 山田宏一 草思社  
『何が映画を走らせるのか?』



778.0 大日方俊子  
ヤマハミュージックメディア  
『知ってるようで知らない  
映画音楽おもしろ雑学事典』



N 775.4 喜志哲雄 晶文社  
『ミュージカルが《最高》であった頃』

ミュージカル

775.4 石原隆司  
ヤマハミュージックメディア  
『知ってるようで知らない  
ミュージカルおもしろ雑学事典』



778.2 萩尾 瞳 近代映画社  
『プロが選んだはじめての  
ミュージカル映画』



公開背景

N 778.0 淀川長治 近代映画社  
『映画と共に歩んだわが半生記』



N 778.0 淀川長治 近代映画社  
『名作はあなたを一生幸せにする』



N 778.0 高井英幸 角川書店  
『映画館へは、麻布十番から  
都電に乗って。』



映画評

I 778.2 双葉十三郎 文春新書  
『愛をめぐる洋画 ぼくの500本』



I 778.2 双葉十三郎 文春新書  
『ミュージカル洋画 ぼくの500本』

N 778.2 淀川長治  
河出書房新社  
『淀川長治映画ベスト 1000』



I 778.0 立川談志 朝日新聞出版  
『談志映画噺』



映画評

N 778.2 近藤道郎 展望社  
『今日のシネマは? 雑学366日』



B 933.7 エリザベス・ヘイ  
文芸春秋  
『ガルボ、笑う』

